第8回・第9回　課題解答　いじめ

Ａ

私は敬愛大学に入学する際の書類や面接時に、小学校の教師になった際に学校問題、特にいじめの問題について取り組みたいと述べた記憶がある。なぜこのようなことを述べたかというと、正直、教師になるために何かしていたわけでもないし、いじめた経験もいじめられた経験もなかったのだが、そんな自分でもニュースやＳＮＳを通じていじめの実態を知ったとき、考えさせられる部分があったからだ。なんの知識もなかった自分でさえいじめというものが深刻であるという認識だったため、いじめ問題は学校問題の中でも重要な問題だと個人的に思う。

　私は被害者側がいじめととらえたらいじめという定義は少し間違っていると思う。例えば消しゴムを貸した際、角を使われたからこれはいじめだと貸した側が思ったらそれはいじめとなるのかといわれたら第三者は首を横に振るだろう。かといって第三者がいじめと判断することが定義かというと、被害者の心情が反映されていないためそれも違うと思う。私は、いじめられた側がいじめた側と絆を感じるかどうかだと思う。絆という表現が抽象的なのでわかりにくいが、例えばバラエティー番組でいじられキャラの芸人がいじられるという場面をよく見る。いわゆる「いじり」と呼ばれるものだが、この「いじり」が成立しているのはいじられる側といじる側に確かな関係性があり、視聴者もそれを認知できているからだと考える。これを現実のいじめと置き換えると、もしいじめられている側が絆を感じなかったらそれはもはやいじりではなくいじめだと私は思う。

　いじめられて自殺してしまう原因は、自殺以外の行動ができないからだと考える。

私が「しない」ではなく「できない」と表現したのは、自殺以外の行動にリスクを生じると思ったからだ。この行動をしたら今後余計いじめられるとか、いじめる人達がいなくなったら友達がいなくなるとか行動することによって今後の自分の生活のリスクを負うことを考えてしまうからではないだろうか。その点自殺には自分には死んでしまうだけなのでリスクはない。その結果自殺を選んでしまうのではないだろうか。

いじめを防ぐには教師のいじめが起こさせない学校づくりも大切だが、生徒と教師の関係性が大切ではないだろうか。この先生なら解決してもらえるかもしれないという、いじめられている生徒のある種の希望的存在にならなければいけないと思う。その上でいじめられる生徒がいじめられないようにするためにどうするかを考える必要があると思う。いじめている生徒を肯定するわけではないが、教師がいじめている生徒を指導すると前述にもあるとおり、いじめが加速する恐れがあるからだ。

　いじめは勿論、解決しなければいけない問題だが、個人の関係性、度合いによって解決法が違うため、解決するのが難しいと思う。しかし、いじめられている人の、教師や親をはじめとした周りの人の手助けによって解決する問題でもあるため、一人一人の認識が重要ではないだろうか。

Ｂ

　いじめは今現在なくそうとしても何らかが原因で起きてしまうものであり、教師が認識しているものもあれば、認識できないような場所ややり方で行われていることも多い。いじめられている生徒に非があるケース(すこし暴言を吐いてしまった等)も考えられるが全く非がなくただ気に入らないからといっていじめのターゲットにされてしまうケースもある。どちらにせよいじめられている本人が「いじめ」と認識したのであるならばそれはもう列記とした「いじめ」であるし、教師としては一刻も早く止めなければならない。いじめられて自殺してしまう理由としては、いじめられている子がいじめている子、観衆、傍観者に対してやめてと言えないことと、周りに助けを求められないことだと考える。クラスのような閉鎖された空間だと、被害者は助けを求めても加害者側に他の子たちも参加してしまい、手を差し伸べてくれる子がいないことがほとんどである。また、周りの親や大人には自分がいじめられているなんて知ったらどう思うか、心配かけさせたくない、いじめられていることが恥ずかしい等の考えが浮かんでしまうため言い出せないことが多い。これらにより肉体的にも精神的にも追い詰められてしまい最終的に死を選んでしまうのではないかと考えられる。防ぐ方法としては、いじめを起こさせない学級づくり、学校と保護者や地域等の連携が大切になる。子どもたちにいじめはいけないことと教えてもぼんやりとしか理解してくれない子も出てきてしまうので、具体例を提示して「この場合、いじめている子といじめられている子はそれぞれどんな気持ちかな？もし、自分がこの子の立場だったらどうかな？」と自分の立場に置き換えることでよりいじめについて理解させる。また、学校と家庭での子どもの様子を互いに報告することでちょっとした変化にもすぐに気付き、対応できるようにしなければならないと考える。

Ｃ

今回三つの資料を読んでいじめの深刻さを改めて実感した。「いじめ」とひとくくりに言っても被害者の感じ方によって様々であることは、教師など被害者、加害者以外の立場に立つものからするととても分かりづらい問題であり、より敏感な察しが必要であると感じた。

　私はやはり大河内清輝くんの遺書についての資料がとても印象に残った。いじめに関わっていた四人組の男の子たちが悪いのは確かだが、この記事を読んで私は学校で毎日一緒に活動していた教師たちに一番の問題があると感じた。まず学校外でいじめととれる行動がされていたとしても教師は気づいてあげなければならない。しかしそれは教師の目の届く範囲ではないので、広い視野と児童一人一人の小さな変化にも気づける敏感さが高レベルで求められるだろう。それに比べて今回の清輝君の事例は、顔にあざを作って登校していたり、自転車の一部が壊されていたことや体育館で下半身下着姿にされていたことだったりを教師は報告を受けていたという事実がある。そんなにも助けてあげられるヒントやチャンスがあったのにも関わらず、本人がいじめを否定したためという理由で対処しなかったのは教師としても人間としても考えられない事態だったと思う。たしかにいじめは先ほども言ったように、被害者がどう感じるかという点で区別されるため本人が否定してしまえばそれまでであるが、もし本当にいじめと感じていなかったとしても清輝君がされていたことは見逃してはならなかったことだろう。そのような点から考えても、教師が本当に児童のことを常に考え生活していたなら、本人が否定したからといってそのままにしておくということは絶対にできなかったと思う。

　このことから私は、いじめへの教師の軽視がなかなかいじめのなくならない最大の原因だと考える。まさか自分の児童たちのなかでいじめが起きているなんて考えたくもないことであるから、教師も人間である以上逃げたくなる気持ちもわかるが、いじめを受けている児童からしたら助けてもらえる最後の砦であるという自覚を忘れてはならないと思った。私が教師となったとき、きっと数十人の児童を一人で掛け持ち日々過ごしていくことで精一杯になってしまうかもしれない。しかしどんな時でも生徒の小さな変化や助けに気づき応えてあげられる教師になりたいと強く思った。

Ｄ

いじめ問題は人間と社会と時代と集団とが交差しあう問題である。いじめを定義すると、同一集団内における相互作用過程において何らかの意味で、優位に立つ者が、劣位にあるものに対して継続的に精神的に身体的攻撃を加えることや除外することを意味する。

いじめを四層構造で考えるといじめっ子の加害者、いじめられっ子の被害者、いじめをはやしたて面白がってみている観衆、いじめを見て見ぬふりをする傍観者に分けられる。

最近のいじめ問題では、反作用である観衆と傍観者についてもよく取り上げられて、問題視されている。確かに観衆、傍観者はいじめを助長することや抑制する重要な役割を果たしています。また、いじめとは気づいていないで起こりうることが数多くあります。なので、いじめ対策の１つとして児童にいじめがどうしていけないのか、一人一人にいじめが起きないように共通理解、意識を持たせて、いじめが起きないクラスの雰囲気を作ることが対策になると思います。

いじめが重大な教育問題とされるようになったのは１９８０年代からである。元々昔からいじめはあったが、それに対する社会のまなざしは１９８０年代ごろに大きく変わった。いじめがどれだけ見えるかは、どれだけ見ようとするかによって変化する。いじめに対する問題意識が高まり、些細なケースでも発見し対処する姿勢で多くの人が共通意識をもち、いじめ問題に臨めば、より多くのいじめが発見され統計上の件数は増えるし無関心であれば減ることがわかった。

現代ではいじめを見る際に加害者、被害者のパーソナリティに原因を求めるのは一般的でなくなり、いじめはそれが発生する集団の問題として捉えられていることがわかった。

特にいじめの四層構造論の観衆、傍観者について深く考えられています。時代とともに、いじめの見方が変化したことによりいじめの捉え方、あり方も変化していることがわかった。

また、実際に多様な個人が生活しているのでいじめが完全になくなることはないと思います。学校間のいじめについて考えると個人がいじめについて考え、なぜいじめが起こりどうしていけないのか理解し、個人からクラス全体でいじめを起こさないクラスの雰囲気づくりを徹底して共通意識をもつことで今よりもいじめは減ると思います。そうすることで周りの環境である観衆、傍観者の対応も変わっていくと思いました。いじめに対して直接注意し、止められるのは、かなり勇気がなければ行動に移せません。また、ほとんどの観衆、傍観者はいじめによる２次被害を受けないためにそのようにしてあり続けています。だからこそ全体で共通理解を持たせることが対策として1番大切だと考えます。共通理解し周りの環境のいじめに対する対応が変われば雰囲気をいい方向に持っていきより良い社会づくりにもつながると思います。今回の学習を通して改めて周りの環境の在り方と重要性について理解することができました。